

## 青木正児・胡適秘蔵往復書簡集補正

青木・胡適書簡研究班代表 竹内航治

はじめに

我々研究班は本論集第二十輯において、青木正児と胡

適の間で交わされた往復書簡集を活字化し、あわせてその日本語訳を試みた。その際拠つたものは、耿云志氏主篇の影印本（1）であつた。ところがその後、青木の手紙を所蔵する中国社会科学院より、それらの手紙のカラー写真を名古屋大学附属図書館に寄贈いただくこととなつたのである。これらの写真は同図書館でのカラー印刷、製本作業を経、『中国社会科学院蔵「青木正児博士、胡適宛書簡集」』と題して刊行され、同図書館と名古屋大学文学部中国文学研究室に所蔵された。これは、本学加

藤国安教授と耿云志氏、中国社会科学院閔傑氏の間で交わされた連絡のおかげであり、その経緯に関しては刊行された同書を参照されたい。

これによつて、青木の出した手紙がもう一通あつたことが判明し、他の手紙についても封筒や葉書に記された宛名のいくつかを確認できた。また、青木が日本語で記し、影印本では読めない箇所があつた手紙も判読できるようになつた。そこで今回、新しく判明した情報をまとめ、前号の補正とするものである（2）。

青木の日本語書簡（2）

（数字は前号に付した手紙の番号と対応する。）

便箋を入れた封筒が確認された。表には「支那 北京 後門内鐘鼓寺 胡適之先生」とあり、裏には「京都市外、修学院村、高野 青木正兒 大正九年十月一日」とある。

この手紙は青木が唯一日本語で書いたもので、絵入りの便箋三枚に渡って墨で綴られている。耿云志氏の影印本では文字が絵に隠れて判読できない部分があり、前号ではそれらの箇所については同氏の中国語訳(3)を参考にして補った。カラー写真のおかげで判明した文字を加え、以下に改めて掲載する。

Please excuse me to write this letter in Japanese.

胡適之先生

御手紙有難く拝見致しました。私は此の手紙を御國の言葉で書かうと思ひました、併し其は無益です、却て意味の通じないものになつて了うでせう。先生の御友達には周作人先生のやうな日本通もゐられますことを知つてみますから、私は安心して此の手紙を日本文を以て認

めます。そして其れが今の處私に取つて意志を傳へるに最も正確な方法だと信じます。只何方かの翻譯を煩はして貴方に通じなければならぬ事を遺憾に存じます。

胡先生！私は貴方がたの勇ましい革命運動をぞく／＼する程嬉しく思つてゐました。私は一人で黙つて貴方がたの雑誌を此の京都の市中から一里ほど巨つた田舎で前山と對し乍ら讀み耽つてほくそ笑んでゐました。私には此の喜びを頌つ可き友が無かつたのです。私共の國では支那文学と云へば四書五經か八家文ぐらひか唐詩選の類ばかりと思つてゐる過去の人が多いのです。今でもお國では論語のやうな言葉が話されてゐるのだと思つてゐる連中があるのです。貴方の所謂博物館裡に葬られ去る可き文学が私共の國では未だ一般の人の頭に生きてゐるのです。私共二三の同志は彼らの迷夢を醒す可く「支那学」を發刊致しました。そして私は真先に貴方がたの勇しい企を彼等の目の前に展観することを痛快に感じてゐるのです。つまり私は貴方がたの威力を借つて私の小さい憤慨を漏したに過ぎません。私は貴方がたに感謝します。

胡先生！私が十二年前支那文学を自分の行く可き道だ

と決定して学窓に憑ると間も無く、私は戯曲小説に親み始めて白話文学の興味を覚えたのです。そしてお國の文壇に白話文学の機運が盛んになるのを待つてゐたのです。林琴南先生の翻譯なんかでは満足出来なかつたのです。戯曲研究家として王静庵先生に望を囑してゐましたが、矢張駄目でした。先生が此地に在住せられた時逢つて見ると、頭の古い人でした。(学究としては尊敬す可きですが) 貴方がたの出現が如何に私を喜ばせたでせう！

胡先生！私は貴方がたの心裡をよく了解してゐる積りです。併し私の頭は自ら乍ら古いと思ひます。私のあの「支那学」中の一編には先生方を十分了解し得ずに誤を傳へてゐる所があるかも知れません。又時に先生方に對して失礼な言葉があるかも知れません。どうか御免下さい。

私のあの稿はもう三回位ひ續けるつもりです。つまり雑誌ですが續けて送りますから御覽下さい。今第二号印刷中です。それから私の道楽仕事に「金冬心の藝術」と云ふ小冊子を今製本中ですから出来次第お目にかけてや

うと思つてゐます。美術のお好きな方でも有りましたら御見せ下さい。先生には御病氣ださうですが一日も早く御元氣になられて御奮闘を願ひます。墨子研究の大著を御執筆中と傳聞してゐますが、早く見たいものです。先生の「中國哲学史」は皆々佩服してゐます。御免下さい。

十月一日夜 青木正兒

大正十年一月一日付葉書

今回新しく確認された繪葉書であり、前号の(13)の次に置くべきものである。表には「支那 北京後門内鐘鼓寺 胡適之先生 恭賀新禧 大正十年元旦 日本京都 青木正兒」とある。裏は門松を飾つた戸口に立つ虚無僧の写真。写真には青木がインクで書き込みをしており、虚無僧の出で立ちには「袈裟」「戒刀」、門松には「這個叫做「門松」(Kado-matsu)日本正月所用的、恰便似貴國的桃符。」と説明が加えられ、さらに以下の文章が書

かれている。「這個半僧半俗的人物叫做「虛無僧」(ko-nu-so)的、他弄的笛子是「尺八」(shaku-hachi)差不多貴國洞簫的遺製、都是旧世紀的遺形物。我很愛這様遺形物。」

大正十年一月二十九日付葉書 (16)

葉書に記されたものと確認できた。表には「支那、北京、後門内、鐘鼓寺 胡適之先生」。

大正十年三月二十日付葉書 (21)

葉書に記されたものと確認できた。表には「中華民國、北京、後門内、鐘鼓寺 胡適之先生」。

大正十年四月十七日付葉書 (23) (24)

ともに、裏は嵐山の桜を描いた絵葉書であることが確

認できた。(23)には「龜山公園下の櫻」、(24)には「千鳥が淵の櫻」と印刷が入っている。青木は(23)で嵐山に花見に出かけたことを記している。

#### 注

(1) 耿云志主篇『胡適遺稿及秘藏書信』黄山書社一九九四

(2) 青木の手紙には正字と俗字とが混ざって使われているが、本稿では元の形を残す。それらについていちいち注記はしない。

(3) 耿云志「関于胡適与青木正児的来往書信」(『胡適研究叢刊』第一輯 北京大学出版社 一九九五)